



## 『心臓血管外科手術の落とし穴』

徳永 滋彦 編集

B5判, 194頁, 定価 7,920円 (本体 7,200円 + 税), 2024年, 南江堂

「落とし穴」というタイトルを冠した本書を何気なく手にとってページをめくると、「あ、こういう本なのか」と新鮮さを感じることだろう。約190ページからなる本書は「手術中の予期せぬ事態」についてののみ書かれている。めくってもめくっても術中トラブルとその対策について記されている、既存の教科書とまったく異なる着眼点でつくられた本である。

心臓血管外科医はほかの診療科と比べて遅咲きで、長い修練期間を要する。それは、心臓血管外科手術には無数の地雷が存在するからにはほかならない。手術を修得しようと思ったら教科書を読むのは有用だが、そこに書かれているのは“how to do”である。それだけ読めば手術ができるわけではない。なぜなら手術には“how to do”のほかに、その何倍もの“not to do”が存在するからである。この“not to do”がとにかく大事で、百戦錬磨の外科医たちは人より多くの“not to do”を知っているから手術の成績がよいのだと推測する。人工心肺カニューレシ

ョン一つとっても無数の“not to do”が存在し、修練医はそれらを指導医から厳しく叱咤されながら学んでいくものであった。たとえば大動脈のタバコ縫合をメスで切らないためには何に気をつけたらよいか、上行大動脈の性状確認はどのようにすべきか、送血カニューレ挿入時に解離を生じないためにはどうすればよいか、こうした知見が本書には全ページにわたり写真やイラストをふんだんに交えながら詰め込まれている。「なるほど、こうすればよかったのか」「え！ こんなことが起こるの？」といった発見の連続が本書にはある。

こういう本をみんな待っていたのではないだろうか。手術中に一歩間違えれば起こりえた危険をギリギリのところで回避できたときや、予期せぬ事態に見舞われても適切に対処して切り抜けたとき、それは患者さんの命を守った瞬間である。本書はきっと日本全国で多くの患者さんの命を守る本になると私は確信している。そして、それは同時に外科医を守ることにもつながる。悲惨な合併症を自らの手で起こしたい外科医はいない。命を預かる外科医にとって、落とし穴を事前に知らせてくれる本書は自分の外科医生命を守る命綱にもなりうるのである。

私の半生を振り返ってみれば、これまでたくさんの落とし穴に落ちてきたように思う。子どものころから勉強や部活、恋愛や人間関係において落とし穴にはまったことは数えきれず、そのたびに不出来な自分に落胆したものだ。成長期のそうした経験の積み重ねで、次はうまくやろうとか、こんなときはこうしたほうがよいとか、そうやって大人に向かって成熟してきた。“Every mistake is a stepping stone towards success”という言葉のとおり、失敗した経験がなければ正解にも辿り着けないような気がする。ただし、自分の失敗談を他人に知られるのは気が引ける。自分は挫折せずに順風満帆な人生を送ってきたように周りに振る舞いたいという見栄があるからである。学術集会や論文で不自然によい成績の発表ばかりがはびこるのも、そうした人間の見栄が働いて人にみせたいよい部分だけを抽出して発表しているからだと感じる。しかし、真に共有すべきは「苦しんだ経験」であり、それは聞く人々に成長をもたらすものだと思う。だからこそ本書は貴重だと私は感じた。「いかにうまくやっているか」よりも「いかに苦しみ、それを切り抜けたか」のほうが聞く人にとって何倍も有益ではなかろうか。

われわれは心臓血管外科医として修練を始めたときから、無数の地雷の中を歩き続ける宿命を負っている。エキスパートとして名高い先生方が「地雷はここにある、もしここを通るのならこうしなさい」と示してくれた情報が詰まった本書が少しでも多くの修練医に読まれ、患者さんの命を救うことを願っている。そして本書の読編が第二弾、第三弾と続いていくことを期待している。

(日本心臓血管外科学会 U-40 代表幹事、  
大和成和病院心臓血管外科病棟長・高橋賢一郎)

